

第4回羽曳野市教育改革審議会 会議録

開催日時 令和6年4月26日（金）午後3時00分～午後5時00分

開催場所 羽曳野市役所 別館3階 会議室

出席者 坂本会長・清水副会長・池上委員・坂井委員・西堀委員・安田委員・新田委員・東委員

欠席者 小林委員

事務局 村田教育長・田中教育監兼生涯学習部長・藤田学校教育部長・黒木学校教育部長・伊藤学校教育課長・寺元教育政策課長・藤原建築指導課長・種村学校教育課参事・河原畑学校教育課長補佐・尼丁教育政策課長補佐

傍聴人 4名

内容 羽曳野市東圏域で今後児童数減少を見据えての学校の在り方の方向性について

【会議内容】

《司会》

ただいまから、第4回羽曳野市教育改革審議会を開催いたします。

私は、羽野市教育委員会事務局学校教育課の伊藤でございます。審議に入るまでの進行役を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします

まずは、羽曳野市教育委員会 村田教育長からご挨拶いたします。

《村田教育長》

改めまして、皆さん、こんにちは。今日で4回目の会議となります。前回の3回目会議では委員皆様の様々なご意見を頂きながら会議を進めてきました。更に今日の会議ではもっと深いご意見を、羽曳野市の新しいまちづくりを頭に置きながら、学校の適正規模化について色々な分野でご意見を頂きたいと思っておりますので、本日もよろしくお願いいたします。

簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。

《司会》

ありがとうございました。

続きまして、本審議会坂本会長よりご挨拶を頂きたいと思います。

《坂本会長》

皆さん、こんにちは。この会議も1年が経ちました。第1回目の会議では「はじめまして」とご挨拶をさせていただいたものです。第2回目の会議では皆で、羽曳野市を知るために、教育長を始めとして教育委員会事務局の職員の方からの説明を聞きながら、市内の小・中・義務教育学校を全て、自分の目で見、自分の体で感じて、羽曳野市の今後を考えようとした会議でした。そして、昨年度末の3月には第3回会議として、本日の資料にもあるように様々な視点から見た羽曳野市の将来を子ども達のために何ができるのかという視点で話し合ったものです。私としては若干、散逸的な意見となってしまったところも反省点としてあります。

本日は第4回目の会議として、後で事務局からの説明もありますが、前回の会議で意見のありましたように広い羽曳野市をまとめて議論することは難しいということで、エリアを絞って話を進めていければと思います。

まちづくりのことを常に頭に置きながら、羽曳野市の将来を考えると同時に、子ども一人ひとりが元気に学校に通えるよう、それぞれの立場から見落とすことなく、見誤ることなく、答えを出すのは難しいとも思いますが、今日も充実した会議を進めていきたいと思います。

《司会》

坂本会長ありがとうございました。

本日、小林委員からは、都合により欠席の連絡がありましたので、この場でご報告いたします。

さて次に、本日の資料の確認をいたします。

お手元資料1としまして、羽曳野市の東圏域の中学校区の児童生徒数の推移グラフとなっております。

資料2は、同じく東圏域の学校所在地の地図となっております。

資料3は、東圏域に所在する学校の創立年等の情報の一覧となっております。

資料4は、前回の会議の発言メモとなっております。

資料5は、羽曳野市の将来推計人口とその減少率を各学校に当てはめた予測表となっております。

その他には、本日の会議資料としまして審議会次第、配席表をお配りしております。お手元の資料に不足は、ございませんでしょうか。

それでは、審議に移りたいと思いますので、坂本会長に進行をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

《坂本会長》

それでは、第4回の審議に入りたいと思います。

まず初めに本日は、1名のご欠席の連絡はありましたが、他の委員の皆様にはご出席賜り、委員総数の2分の1を超えておりますので、羽曳野市教育改革審議会条例第6条第2項の規定により、この会議が有効に成立しておりますことをご報告いたします。

併せて本会議の署名委員に私と新田委員にお願いしたいのですが、よろしいでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、前回は、子ども達の数減少に伴う学校の課題、また逆に少ない規模だからこそできる教育等について様々な意見が出されました。それぞれ委員の皆様の立場やご専門のご意見を頂くことができました。

本日の会議においても、前回同様に活発なご意見を頂けたらと思います。

それでは最初に、事務局から今回の審議会で議論のテーマ、その柱立てとなる資料についての説明をお願いします。

《黒木理事》

こんにちは。本日も大変お忙しい中、お集りいただきまして誠にありがとうございます。

羽曳野市教育委員会事務局、学校教育部理事の黒木でございます。

本日は、本年度第1回目の会議となります。本日も活発なご意見を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、前回の会議では、児童生徒数の減少に伴う様々な影響について委員の皆様からご意見を頂きました。非常に貴重なご意見をいただきありがとうございます。会長がおっしゃったとおり、本日も活発な意見交換をよろしくお願いいたします。

さて、前回の話し合いの最後の方で本市の西の圏域の部分と、東の圏域は校区の広さが大きく異なっているため、分けて議論した方が良いのではという意見がございました。そこで、今回は、当市の東圏域に絞って議論を進めていただけたらと思います。なお、東圏域の話をするにあたって、本日はゲストとして、羽曳野市内で一番小規模校である駒ヶ谷小学校、古市南小学校、中学校からは誉田中学校のそれぞれの校長先生にも出席していただいております。話し合いの中で必要であれば学校の様子等についてご説明していただこうと思います。本日も委員の皆様のご意見をいただきながら、一定の方向性や、気を付ける点、大事にしておくポイント等がまとまればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

引き続き資料の説明をさせていただきます。

本日配布しております資料は、東圏域の学校に絞ったものとして、以前にお渡ししております資料の中から東圏域の部分を変えてまとめ直したものといたします。

まず資料1ですが、東圏域には2つの中学校がございます。誉田中学校、峰塚中学校の2つの中学校の児童生徒数の推移を平成19年から令和11年まで、現在の出生数をもとに算出しております。縦軸を同じ千人のスケールにしておりますので、2つの中学校を比べること

ができます。

中学校ごとに見ていきますと、菅田中学校は平成 19 年を基準としますと、令和 11 年には約半数に減少することがお分かりいただけると思います。

峰塚中学校については、平成 29 年の 988 人をピークに令和 11 年には約 3 割減少となる 647 人となるとされております。

次のページには、峰塚中学校区に所属している小学校、菅田中学校区に所属している小学校についてそれぞれ色分けして標記しております。ご覧のとおり、どの小学校についてもピーク時から令和 11 年には、半数もしくは半数以下と示されています。

次に資料 2 をご覧ください。

以前は、バラバラに分かれた校区図をお配りしておりましたが、東圏域だけを 1 枚にまとめたものを、校区ごとにカラーで記しています。ただし、白鳥小学校と古市小学校の間の地域、西浦小学校と白鳥小学校の間の地域については、以前の会議でご説明いたしました調整区となっております。

菅田中学校区は黄色で、峰塚中学校区は青色で記しております。また、地図の右上には 1 キロメートルのスケールをご用意しておりますので、その距離感をお分かりになれるかと思います。

なお、国が示しております小学校の通学区の距離は 4 キロメートル以内、中学校は 6 キロメートル以内で、その基準を満たしております。なお、中学校において校区が広がる場所もありますので、4 キロメートル以上においては羽曳野市では自転車通学を認めております。

資料 3 をご覧ください。

それぞれの学校の創立年と、創立当初の児童生徒数等のデータとなります。また、校区の特徴等も記載しております。黄色で色付けしている部分は、創立当初と比べて児童生徒数が半数以下に減少している学校となります。

資料 4 をご覧ください。

前回の審議会でのご意見のメモとなります。箇条書きで記載しておりますので、今回の審議会でご活用していただければと思います。

最後に資料 5 をご覧ください。

こちらは新しくお示しする資料となります。

国立社会保障・人口問題研究所が発表する、2050 年までの市毎の人口推計となります。ご注目頂きたいのが、オレンジ色の折れ線グラフで 1 歳から 14 歳までの人口となり、2020 年の 12,372 人から 2050 年には 6,213 人の約半数となると試算されています。

この減少率を、現在の小中学校の児童生徒数にかけたものが資料 5-①の表となります。

その表上、黄色で示しているところが、国が示す標準学級数を確実に下回る場所となります。

10 年後の令和 17 年には、約 7 割の小学校が少人数、単学級の学校となります。また中学校

は10年後には急激に児童生徒数が減少する状況となります。更に予測では、2050年令和32年には、東圏域のほとんどの学校が標準学級数を下回る事となります。

東圏域の概要、資料の説明は以上となります。

《坂本会長》

ご説明ありがとうございました。

まずは事務局に確認したいのですが、理事の方からご説明があったように、前回の審議内容を受けて、本日の審議は東圏域に絞って審議するという事でいいですか。

それから、今のご説明にはなかったことですが、本日は東圏域に絞るということは、第5回審議会には、一括か別日に審議するかは別にして、残りの西圏域・中圏域について別途審議する事でいいのですか。

《黒木理事》

そのとおりです。

《坂本会長》

わかりました。

それでしたら、まずは、今ご説明頂いた資料について、なにかご質問等はございますか。

審議の途中でも構いませんし、今日は東圏域で校長されている方もご出席いただいていますので様々な実際のところについてご説明頂けたらと思います。

つい最近、新聞やニュースでも、30年後には何割の自治体は消滅する等も報道されていますし、今日の資料5に関して、とてもリアルタイムなものだと思いました。

もちろん羽曳野市だけが、このような問題に直面しているわけではなく、日本全国で大きな問題として起こっていることです。先ほどの説明にもありましたが、14歳以下の子どもの数は推計上では間違いなく半分になるとされています。

つい昨日、私自身が学生に対して、人口減少に関して、リアルな話をするため、現在と私が教員になった40年前を比べて話しました。

私が教員となった時代は、大阪府の小中学生の数はほぼピークでした。若い方からすれば、嘘みたいな話ですが、中学校にはふつう1,000人以上いて、1学年に10組とか12組とかがめずらしくない時代でした。

当時、大阪府には小中学生併せて140万人いました。それが今では60数万人です。昔、子どもの数は、将来半分になると言われていたが実際には半分以上を切っています。

また、今日の資料5においては、将来子どもの数は半分以上を切ると示されているように、大阪府全体の子どもの数の減り方と羽曳野市においても同じ割合で減少していることがわかります。加えて、大阪府全体の学校数はここ20数年で小中学校併せて60校以上が廃校または統合により減っている状況にあります。そのことの是非はともかく、子どもが半分になり

学校数は減っていることは事実としてあります。

それでは、東圏域の学校について資料を基に、子どものことを頭において今後の方向性について議論をしていきたいと思います。

毎日子どもと接している校長先生からご意見をいただきたいと思います。

《東委員》

私も昨年度まで、教育委員会にて、羽曳野全体を見るが多かったので、その経験を踏まえての意見になりますが、羽曳野市は先ほどの事務局からの話にあったとおり、羽曳野市の東圏域の校区は西圏域に比べると広がっていて、特に駒ヶ谷小学校、西浦東小学校は市街化調整区域に指定されている土地が多いため、新たな住宅開発は見込めず、年々児童数が減少すると同時に、学級数も各学年単学級になっておりました。

前回の審議会で意見もありましたが、小規模校は1クラスあたりの人数が少ないことによる良さもあり、教師側からすれば、一人ひとりの状況がつかみやすくきめ細かい指導ができることや、子どもの立場からすると、一人ひとりがリーダー等の役割に触れる機会が増えること、学年を超えたつながりができること等良さもあるのはわかりますが、ただ今後も資料5のとおり、児童数の増加の兆しはどの校区でもありませんので、以前の話し合いで出たような人間関係の固定化等、少人数での課題の解決のために何らかの方法を考えなければと思っています。

それが、この東部地区では早いということが言えます。何年後かはわかりませんが、1学級あたりの数が今以上に少なくなったときにどうしていったらいいかという方向性があればいいなと思っています。東部地区は校区が広いので通学距離の問題がありますが、何らかの方策は考える必要があるのではと思います。

《坂本会長》

ありがとうございました。

東委員は、以前は教育委員会事務局におられたことから、東圏域に限らず市域全域を見ておられた立場からのご意見をいただきました。

それでは、新田委員お願いします。

《新田委員》

昨年度までは、小規模の西浦東小学校の校長で、今年度からは中規模の西浦小学校の校長ということで隣の校区へ移りました。その中で感じたことです。

小規模校ならではの課題としては、全体的に教員の数が足りないといった話もありましたが、久しぶりに中規模校へと異動しまして、先生方が帰られるのが非常に遅いと感じました。小規模校では、児童生徒数が少ないこともあり、先生方とマンツーマンで取り組んでいました。中規模校では、小規模校に比べて課題が多いわけではないのですが、子どもの数は西浦

東小学校と西浦小学校では、3 倍の差があります。その中で、子ども達と先生方の絡みも 3 倍になります。

地域との繋がりも時間がかかる中で、教材研究もそれ以降からしか取り組めない状況にあります。この点は、小規模校にいてるときには見えていなかった点です。

また、西浦幼稚園の園長も兼ねていますが、今年度の園児は 2 名でした。このような中、保育を行うことは課題も多いので、スクールバスにて羽曳が丘幼稚園で合同保育を実施しています。なので、小学校での職員朝礼が終わり次第急いで幼稚園に行くのですが、もう既に園児達のバスは出発してしまい、園児達に会えないこともあります。小学校の始業式や卒業式を終えてから、幼稚園に行くこともありますが、西浦幼稚園ではなく羽曳が丘幼稚園に行くことになりますが、なかなか移動が大変なことがあります。このことを小学校に当てはめてみると、例えば、小学校を別の小学校に移ることはなかなかハードルが高いなと感じました。西浦東小学校は元々西浦小学校から分かれたものですが、西浦東小学校の南の端の方は、富田林市の喜志小学校の近くから来ている子ども達が、子ども達の人数が減ったからと言って西浦小学校に戻れるのか。歩いて登校するのは難しいのではないのか。学校を統廃合をしていくためには、様々なハードルがあることを感じました。

まだ、学校が始まってから 1 月なので、今後様々な課題等も感じていくことになるのだと思います。

《坂本会長》

ありがとうございました。

幼稚園の園長も兼任されているとのことで、そんな苦労もあるんだと知れたと同時に、2 人の幼稚園児は毎日をどのような気持ちで過ごしているのだろうかと思いを馳せました。また、実際に小学校の規模が小さくなっていったときに、学校の数はともかくとして、学校を移動するという、自分のホームグラウンドではないところで学ぶということに対して、教育的な効果はどういうことがあるのかと思いました。逆に人間関係にどのような影響があるのか、子どもの学びや育ちを考える上で、とても重要なことであることを改めて教えていただいた次第です。

それでは、今日の議題である東園域の学校で毎日子ども達と接しておられる校長先生に、学校の様子をご紹介いただくとともに、学校の管理運営のトップとして羽曳野市の教育や子ども達への今後の教育について、学びという視点でご意見や考え方について伺いたいと思います。

まずは最初に、駒ヶ谷小学校の塚本校長先生をお願いします。

《塚本校長》

駒ヶ谷小学校校長の塚本です。よろしくお願いします。

本校は、令和 6 年度に新たに 20 名の新入生を迎えまして、全校児童 94 名と羽曳野市とし

で最も小規模の学校となります。昨年度は、本校が 150 周年を迎えたアニバーサリーイヤーとして、市長をはじめ教育長や地域の方とともにお祝いをしました。

駒ヶ谷小学校が設立されたのは明治 6 年であり、明治、大正、昭和、平成、令和と 5 つの元号をまたぐ、長い歴史のある小学校であります。

地域や保護者の方の協力のもとに、地域の地場産業を生かした取り組みを行っていますが、先ほどからの話にもありますように、小規模校であるがゆえに単学級であり、人間関係においてトラブル等があったとき、例えば、この子とこの子にトラブルがあったからクラス替えをしたくてもできない状況です。子ども自身も、新しい人間関係を別の場所で築くことができない状況です。そのため、そのままの関係のまま 6 年間を過ごすことになります。

実際に、このようなトラブルを乗り越えて、新しく人間関係を再構築することができれば、それはとても実りのあること、力になることではありますが、やはりそのような子ども達ばかりではなく、ずっとその関係を引きずってしまうことも多くあります。

本校を卒業していった子ども達は、中学校に入学したときに、まず小学校との人数の差に大きな衝撃をうけます。私も実際に中学校のクラブ体験に一緒に行かせてもらうのですが、そのバスの中で、子ども達から「どんなんやろな」や、言い方はきつくなりますが「他の学校の人たちは敵だ」といった声が上がることがありました。このような、閉鎖的な考え方をしているところもあります。もちろん最終的には、実際にクラブ体験を一緒にする中で打ち解けていきます。

このような考え方を払拭する意味でも、本校ではコミュニケーションをとる機会を多く作るため、縦割り班活動を特別活動の中で多く取り入れています。

地域との関わりでは、地域の事業所から協力を得て、キャリア教育につなげた取り組みも行っています。

このような、たくさんの人との関わりの中で、「自分たちだけ」という壁を作らないような取り組みを心がけています。

《坂本会長》

ご紹介、ご説明、ありがとうございました。

私からお聞きしたいのですが、駒ヶ谷小学校の今年の 6 年生は、何人でしょうか。

《塚本校長》

今年の 6 年生は、15 名となります。

《坂本会長》

駒ヶ谷小学校の 6 年生が中学生になったら、誉田中学校に進学すると思うのですが、誉田中学校の新 1 年生のクラスは、何クラスになりますか。

《松村校長》

3 クラスです。

《坂本会長》

ということは、だいたいはクラスに均等に分けるので、駒ヶ谷小学校を卒業した子ども達は、菅田中学校に進学したときに、知っているお友達は、クラスに5人となります。リアルな数字で考えると、子どもの気持ちになれるかなと思うのです。

先ほどの校長先生のお話にもあったように、「敵ではないのに、敵だと思ってしまう」という状況がより分かりやすくなるかなと思います。

それでは、引き続きまして、古市南小学校の船橋校長先生よろしくお願いします。

《船橋校長》

古市南小学校の船橋です。よろしくお願いします。

私は今までは西圏域の小学校勤務が多かったのですが、古市南小学校という東圏域の小学校に転勤して2年目です。

本校は古市小学校より少し南側に位置しており、より南側の田畑が多く残る西浦東小学校より住宅地寄りにあります。古市駅から石川を横に見ながら、もう少しまちに近いところにあります。

駒ヶ谷小学校は6年生が15名でありましたが、本校は30名となりますが、やはり単学級です。私が転勤したときに驚いたことになるのですが、その30名に対して、色々な原因で学校に不登校または不登校気味の子どもが5名おりました。友達同士のトラブル等、人間関係が構築できなかった中で、クラス替えという新しい環境になることができない状況です。もちろん、子ども同士の関係の中で、相手の子どもも成長していきますが、他学年や地域との交流を取りいれているとはいえ、毎日顔を合わし、学習や行事をともにすることは難しい状況であると思います。以前勤務していた西圏域の学校では、3クラスほどありましたので色々な組み合わせでのクラス替えが可能でしたので、東圏域の特徴ではないかと思いました。

もちろん、地域の方々の協力のもと、ウォーキングや夏にはラジオ体操等を子ども達と同じTシャツを着て、同じサングラスをかけて取り組んでいます。その中で、関係がよろしくなかった子ども達同士が言葉を交わしたりすることも、少しずつではありますが見られています。

《坂本会長》

ありがとうございました。

他の委員の方で、今の説明に対して追加で聞きたいこと等はございますか。

《清水委員》

6年生が30名、全児童数が265名ということですが、学年ごとに人数のバラつきがあるかとは思いますが、学年ごとのクラス数はわかるでしょうか。

《船橋校長》

1年生から5年生までは2クラスですが、2年生の児童数が39名ですので、クラスを割ることで1クラスの人数が少ない状況です。その他はだいたい1クラス24～25名です。

《清水委員》

6年生での不登校気味の子ども達が、30名に対して5名ということは1／6ということなのですが、他の学年も同様の傾向なののでしょうか。それとも、6年生の単学級が故の傾向なののでしょうか。

《船橋校長》

今年度、誉田中学校に入学した新1年生も2クラスでしたが、人数は5～6名の不登校気味の子ども達がおりました。

《坂本会長》

他の委員の方はよろしいでしょうか。

同じ東圏域の隣接する学校でも、環境や子ども達の様子が違うことが両校長先生のお話から分かりました。

子どもの育ちに関しては、色々な考え方ができて、学校が小規模だからいいケースもあれば、小規模だから固定化してしまう。大規模だから、ある種薄まることによって子ども達は気持ち楽になることもあれば、大規模であるから、子ども達と先生の関わりが薄くなって、自分が見られてない感があるなどがあります。

このような環境下で育った子ども達が進学する誉田中学校の校長先生にお話をお願いします。

《松村校長》

誉田中学校の校長をしております松村です。よろしくお願いします。

誉田中学校は、現在337名の子ども達がいます。先ほどの駒ヶ谷小学校や古市南小学校の校長先生からのお話にもありましたが、子ども達が中学校に入学してきて、まず初めに配慮すべきことはクラス分けです。

先ほど、坂本会長の話にもありましたように、駒ヶ谷小学校の子ども達をどのようにクラス分けして、入学させてあげるのかが1つ目の課題となります。

全学年3クラスあるのですが、駒ヶ谷小学校の子ども達がさみしい思いをしないように、3

クラスではなく2クラスに分けて入学させています。残りの1クラスには、駒ヶ谷小学校の子ども達はいない状況です。

一方、古市南小学校は30名ですので、3クラスに分けても10名ほどはいるので大丈夫かなと思っています。

私は誉田中学校に長く勤務しており、現場の生活28年の中で17年ほどは誉田中学校で、駒ヶ谷小学校が小規模であるのは、ずいぶん昔からの話です。

駒ヶ谷小学校の子ども達は、3世帯同居の子たちも多く、穏やかな子が多いように思います。半面、一旦人間関係が崩れてしまうと、中学校でも不登校傾向にあるようにも思います。

私が現役の教師であったころの古市南小学校は、新築住宅が多く建設された頃で、駅から少し離れていることもあり、手に入れやすい価格帯であったこともあり、共働き家庭の子ども達が多かったように思います。また、古市南校区には大きな府営住宅もありました。

一方、古市小学校校区には、同じ名字を持つ子たちが数多く、旧家が多い地区で児童数も多かったため、古市小学校を中心に古市南小学校、駒ヶ谷小学校をいれ中学校運営を長年してきました。

ただ、3つの小学校から進学してくるというのは、峰塚中学校は規模が大きいので4つの小学校ですが、それを除いてけっこう大きなことで、だいたいは2つの小学校が多いです。

中学校を卒業したら、その後は広い世界に旅立ちますので、人間関係を築く力をもつことが最大の課題でした。そのため、誉田中学校では、集団作りを徹底して行っています。例えば、班活動やリーダー活動等に取り組んでいます。

登校も不登校気味の子ども達は非常に多いです。2割に近い子たちが不登校傾向にあります。その中で、中学校で不登校になった子は非常に少なく、どちらかというと、集団になじみにくい子たちであると思います。そのためにも、コミュニケーション能力をつけてやることは大事だと思っています。

幸いなことに、誉田中学校は向こう5年ほど、児童数は微減で済んでいます。本校にとって1番怖いのは、私学抜けです。駒ヶ谷小学校校区は、経済的にも恵まれたところであるので昔から私学抜けが多い校区でした。古市小学校区も同様でした。

そのような中で、本校は地域から愛される学校でなければならないし、地域に認識してもらわなければならないと色々な取り組みを実施しています。その1つとして、ちょうどコロナ禍で色んなことができなくなる中、あまりにも子ども達の気分が沈んでしまっている、生徒会主導のもと中庭のシンボルツリーから始めて、冬の時期に校舎全体をライトアップして、地域の方に公開しました。270名ほどの方に来ていただき、非常に喜んでいただきました。このように、誉田中学校を地域の学校として、みんなが行きたいなと思ってもらえる学校づくりに取り組んでいます。

もう1つ取り組みを紹介させていただきますと、もうすぐ中学校給食の全員喫食が始まりますが、残食が多いという問題があります。なんとか、残食を減らそうと、その残食を集めてコンポストで堆肥にして、その堆肥を使って花を育てて、その花を幼稚園や保育園に配ると

いう取り組みをしています。

子ども達は、このような取り組みをすることで、例えば、花を幼稚園に持っていくときに「ありがとう」とお礼を言われると、子ども達も喜びますし、子どもの意識調査の中で「班活動の中で何か活動をするのが楽しい」といった回答が 95%というように、成果があることだと考えています。

誉田中学校は、「地域に愛される学校」「ライトアップ誉田を地域の風物詩に」を合言葉にし取り組んでいます。

《坂本会長》

ありがとうございました。

私も大学を卒業してから十数年の教員生活の中で、当時は荒れた中学校の代表のような中でしか教員生活を送ったことがないもので、頑張りの裏側の苦労も感じられました。

他の委員の皆様、なにかございますでしょうか。

今日の議論とは直接かわりはないのですが、ヒントになるかなと思うことを紹介します。

「もしも」という仮定ですが、例えば、他市で取り組んでいるような学校の統廃合というような具体的なことになったとき、一方の学校を残して、他方の学校を廃校とした場合は、今までどりの学校に通う子ども達と、今までと違う学校に通う子ども達がでできます。このことは、案外メンタルへの影響があったり、地域の特性や住民の気持ちにも影響します。環境が変わるといってもヒントとなるかなと思いました。

加えて、どの程度現実的な問題かはわかりませんが、私立の中学校等に進学することは、全国的にあります。私も大阪府内の他市の会議に出席する機会もありますが、その会議の中で、子どもは増えているけれども、中学校へ進学する子どもは減っているという市もあります。それは、交通の便であったり、進学ができる私立の中学校の数であったり、いわゆる今どきの保護者の方の一つの傾向として、私立の中学校への進学を選択する傾向があります。金銭的な部分であったり、私立の学校の校風や特色であったりも当然あります。

単純に、子どもの人数だけをみていてはわからないことになりますが、予想しにくいことではありますが、学校数を検討していく上では、考慮・配慮すべき 1 つの要因になるかなと、校長先生のお話を聞いて思いましたしです。

それでは、前回までの議論の内容を踏まえて、かつ、本日の東圏域という限った地域での実情を聞いた上で、各委員のご意見をお聞きしたいと思います。

保護者の立場として、言いたいことや聞きたいことがたくさんあるのではないかと思いますので、まずは安田委員にお願いしてもよろしいでしょうか。

《安田委員》

高鷲北小学校 PTA 代表をしております安田です。よろしくお願いします。

私自身、PTA の会長になって、なにをモットーとしてやっていくべきかと考えたときに、やはり先生、地域の方とともになにか新しいことを子ども達のためにできたらいつも考え

ています。

東圏域に関しては、広い地域の中で実際に統廃合となった場合に、私が PTA 会長をしているとしたらどのようにしていったらいいのかと思いました。全国的に PTA の存在に対して、賛否がある中で、PTA のやり方も変化していかないといけないと実感しています。

10 年後、20 年後、30 年後はあっという間に来ると思うので、「まちづくりは人づくり」とも言いますので、PTA の意見としては「子ども達の安心・安全」のため、通学路の整備、例えば、今の段階でも狭い道路や信号機のない道路、地域によっては通学路で旗持ちの人がいる場合やいない場合があるなど様々なので、大きな取り組みではありますが、慎重にあせらずに、保護者や先生等いろんな意見を聞いた上で、もちろん全員の意見を組み入れることはできないとは思いますが、羽曳野市としてよりよい方向にしていけたらと思います。私も PTA として、先頭に立ってお役に立てたらと思います。

《坂本会長》

ありがとうございました。

今の安田委員の意見の中で、いろんな大事なことがあれでも、子どもためにという、親としては他のことは多少置いとけたとしても、子どもの安全だけはこの気持ちには非常に共感しました。

また、市がまちを作っていくときにも、置いておくことのできない問題であると感じました。東圏域というエリアを限った中で、様々な意見やお話がでましたが、他の委員の皆様、何かご意見、感想はございますでしょうか。また、今後の議論のために、なにかご紹介していただいても結構です。

《西堀委員》

大阪工業大学の西堀です。よろしくお願いします。

貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

今日は、東圏域を集中的に議論するということですが、羽曳野市の認識としては、この東圏域が市域全体の中で、最も厳しいということでしょうか

《黒木理事》

そうです。

《西堀委員》

わかりました。

今日のお話をお聞きする中で、東圏域に限ったことではないのですが、今後の議論を進めていく上で、今回お示ししていただいております人口推計において赤字で示されている、令和 17 年や令和 32 年というのが目安としてよいのかを、全員でイメージを共有した方がよいの

ではないかと思いました。

この教育改革審議会の中で、一定取りまとめていく上で、5年後のことを議論するのも1つだとは思いますが、それであれば、また5年後に再度議論をしなければならないこととなってしまうし、そのあたりの着地点をどう考えるのかを、これからの議論をする上で考える必要があるかなと思いました。

私自身は、おそらく10年、20年後を目安にするのかなとは思っていますが、またこの場で議論ができたと思います。

東圏域の話をしますと、駒ヶ谷小学校が最も児童数が少ないということですが、現時点での児童数で運営が可能であるという考え方もできるのではないかと思います。一方で、先ほどからお話のあった、単学級に関する問題をどうとらえるのかがポイントかなと思いました。単学級の問題を含む、児童数が減っていくことで生じる様々な問題を解決するために、児童数の増加を見込めない中で、統廃合することは1つの選択肢ではありますが、この教育改革審議会の中で、いい知恵を出して別の選択肢がでてくるのかなと思っております。

最後になるのですが、単学級の問題がありますが、今日のお話の中で私の中で勇気がもてたこととして、人間関係がうまくいかなかった子ども達が再構築できることや中学校に進学することで環境が変わることですうまくいく場合もあることをお聞きできてよかったと思いました。

また、地域が学校を支えるという話しの中で、学校だけの環境で完結するのではなく他の環境下が子ども達の成長を支えることになるのだなと思いました。

このような取り組みが、単学級の問題を解決していくのだとも感じました。

《坂本会長》

ありがとうございました。

西堀委員の前段の話の中であった、これからの議論の進め方については、非常に大事だと思います。

議論を進めていく前段で、皆で確認をせずに進めてしまったという反面、今この場でどうしましょうかと議論するのも難しいことです。

最後に改めてとは思いますが、次回の会議に向けて、次の議論を進めていくときに、事務局から要望や提案をしてほしいと思います。

今日の議論の中身が、次回示していただく要望や提案に繋がっていくようにし、次回の会議での西圏域、中圏域と議論を進めていきたいと思います。

引き続いて、他の委員はどうでしょうか。

《坂井委員》

日頃、学生がお世話になっております四天王寺大学の坂井です。よろしくお願ひします。今お話をお聞きする中で、子どもの数を一定にするというのは厳しいことだと、実際感じています。

校区の広さを見ても、石川の右側にある駒ヶ谷小学校については、非常に広いです。これをどこかと統合して、子どもの数だけを合わすというのは適切だとは思いません。むしろ子どもの数が少ない中で、メリットを最大限生かす時期が来ているのだと考える方がいいのではないかという気がしています。

石川の左側、境目が近鉄電車ではないかと思いますが、古市小学校がちょうど真ん中に来ています。

学校の場所を動かすというのは、ありえないことでしょうか。例えば、誉田中学校は校区の北の端にあるのを、もう少し南に持ってきて、どこか別の場所に建設するといった工夫をすることで、通学区域を大幅に変更することなく、ある一定の子どもが集まるような学校の建て替えはありえないことなのでしょうか。お金がかかることではありますが、跡地を使うということでしたら、なんらかの方法は考えられるのかなと思いました。

西浦小学校はあまり触れられていないのですが、これは子どもの数が多いからでしょうか。

《新田委員》

372名です。

《坂井委員》

今日、久しぶりに古市駅から歩いて市役所まで来たんですが、古市小学校の近くを歩いて白鳥のあたりを歩いてきたのですが、たくさん家がありました。

現実的ではないかもですが、誉田中学校の位置を動かして、小学校区を少し変えらるともっと均等になるのかなと思いました。

《坂本会長》

ありがとうございました。

今のご意見に、それぞれの立場からの表情が見えました。この場合は、審議する場ですのでいろんな意見を出していただく方がよいと思います。坂井委員もご自身でおっしゃられていますが、現実的に何年後に、どれくらいの金額が必要なのかを考えたら、大きな壁や問題があるとは思いますが。

また、その学校に対する愛着をお持ちの方に対して、場所を変えることはいいのか等、別の問題もあるかと思いますが、可能性があるアイデアに関して、議論することはとてもいいことだと思いました。

《池上委員》

お話を伺っていて、子ども達をエンパワーするような取り組みはぜひとも広げていただきたいと思います。

確かに、学校規模が小規模化していくということは全国的な傾向であるため、大学生を見て

いても、小規模化した環境で育ってきています。子どもの数が減っているということは、それに関わる大人との関係は増えていることになりますので、そうした力をどんどん学校に呼び込んでいくように、学校をコミュニティの中心にするような流れが大事なのではないかなと感じました。

併せて、教職員の働き方についても、教職員の人数が増えて、子ども達に関わることもできたらしいのですが、その議論がなかなか前に進まない中で、地域の方の力を呼び込むことが大事だと改めて思いました。

《清水委員》

関西学院大学の清水です。よろしくお願いします。

私は、教育ではなく建築や都市計画が専門になりますので、また違った視点での意見になるかと思います。

いずれ、なにかしらの方策を考えなければならないとなったときに、リミットの設定はどこになるのが気になりました。

確実に減っていく児童数というものを、ご提示いただいた中で、実際どこまでであったら耐えられるのかと。もしくは、ここまでが限界でということがわかっているのであれば、その時点を過ぎると、ある意味次のステップに進まざるえないなど、そういったリミットの設定を今後は考えていかないといけないと思いました。でないと、時間だけが過ぎていき、気が付いたときには、遅きに失することとなってしまいます。

リミットは、学校の状況にもよるのであれば、同時に校区の再編も考えなければならない、特に今日の議論のテーマにもなっています駒ヶ谷小学校が、今の校区のままでは、設定したリミットを過ぎそうであれば、今は石川東側の一部だけが古市小学校区になっているかと思いますが、これを駒ヶ谷校区へとすれば状況は変わるではないかが検討されるのではないかと思います。

校区を今のまま維持するのかということは、学校を統廃合というだけでなく、再編という視点も持っていく必要があるのではないかなと感じました。

いずれ、統廃合を現実的に考えなければならないときには、その跡地の問題や校舎の利活用を合わせて地域に提示しなくては、地域の方も受け入れるのは難しいのではないかなと思います。ながらお話を聞いていました。

ある意味、坂井委員のお話にありました、誉田中学校の移転も施設維持の点からだけ考えますと、あり得る話だと感じました。

奈良高校という歴史ある高校が山の上にありますが、一昨年に近鉄高の原駅の近くにあった高校に移転し、元々の高校が別のところに移転したことがありました。そのときも地域で様々な議論がありました。伝統的で歴史のある奈良高校が場所を移るということで、OB会や同窓会等、大変もめたと聞いています。移る前はそのような状況でしたが、実際に場所を移った後は意外とスムーズに移行しました。そこに至るまでに、地域の方とのコミュニケー

ションや説明会を実施するなどの手間をどこまでかけたのかは定かではありませんが、高校と中学校の違いはあれども、学校の移転は手法の1つとしてはできない話ではないのかなと思いました。

また、今後の地域の土地利用について、市街化調整区域も多い中、新しい世帯の流入は難しい地域もある一方で、前々回に駅前地区で次の再開発が起きそうなところも西の方で見学させていただいたかと思います。

地域の今後の開発状況も視野に分析をしなくてはいけないと感じました。

地域の小学校以外、例えば図書館や公園施設との距離感については、学校をどこに集約していくのかを考える上では必要となることと思います。

通学距離について、小学校は4キロメートル、中学校では6キロメートルとの話もありましたが、それ以外に、子ども達はどこで遊んでいるのか、子ども達が行く場所はどこになるのかを校区内できめ細やかに見た上で、どこに落としどころを見つけるのかを考えていくのがよいのではないかと思います。

最終的にどのように整理していくべきかを考えたときに、児童の数だけでなく、施設の密度であったり距離感であったりをもって、マトリックスを組んでみて、リミットの設定をしていかざるを得ないのではないかと思います。

《坂本会長》

ありがとうございました。

専門の異なる人間、違う立場の人間が情報を受け取ったときに、どのように考えるかということは非常に大事だということを、今日の会議で改めて感じたと同時に、このことこそが、私たちが諮問されている意義だと感じました。

答申に盛り込む内容を考える上で、子どもを大事にすることはもちろんのことですが、他の何物も犠牲にしたらだめなのかというと、それも非現実的であります。

次回以降の会議で議論する、西圏域や中圏域についても今回同様にいろんなご意見を頂きながら、また今回の会議で話のあったリミットの設定についても、委員の皆様で共有したいとおもいます。

これまでの会議では、私も教員ですので、子どもの顔や気持ち、校舎等、気持ちに重きがありました。一定そこを離れて冷静にまちづくりの観点から改めて考えなければならぬ今回の会議では感じたところです。

これまでの議論を聞いた上で、東委員、新田委員、何かご意見やご感想をお願いしますでしょうか。

《東委員》

私は、教育委員会事務局に長いこといましたので、誉田中学校の移転の話は、うわっと思いつつながら聞いていました。

確かにリミットの設定ということは、5年後、10年後はすぐくるかと思います。どこを見据えてまちづくりを考えていくべきなのかですが、私も校長という立場ですので、まずは子どものことを考えてやっていきたいと考えています。

今後は事務局からリミットの設定の案が提示されると思いますので、それをまた改めて会議の場で議論して、共有認識としていきたいと思いました。

《新田委員》

私が今いる西浦小学校は、372人子どもがおりますので、あまり再編ということは、学校や地域も感じていない状況ですが、危機的に感じているのは高齢化ということです。

ただ、西浦東小学校にいたときには、地域の方からも「学校なくならないよな」「子どもが何人になったら学校はなくなるんや」「子どもを中心に学校があることで、自分たちは頑張れるんだ。もし学校がなくなったら、どこを中心にコミュニティを作っていったらいいのか」等と不安という地域の声をよく聞きました。

これまで学校がなかったところに学校ができたということで、地域がよみがえり学校は地域の中心となっていると、地域の方は感じているところです。

そういう経験があったので、私はやはり、子どもや地域の方の顔が浮かんでしまいます。

例えば、西浦と西浦東、古市南の間にある三角で囲まれた部分で、私が西浦東小学校にいたときは、古市南小学校とすれ違いながら西浦小学校をとおり過ぎて、西浦東小学校にくる子ども達がいましたが、ただ机上では、古市南小学校に西浦小学校にと単純に区切れても、そこには地域の人の思いがあるので、なかなか難しいなと感じています。

白鳥地域での入り組んだ地域というのは、単純に白黒がつけがたく、リミットと人の顔が浮かぶと、さらに難しいなと改めて感じました。

《坂本会長》

ありがとうございました。

今、新田委員の方から、入り組んだ校区の話がありましたが、なぜそのような校区になったのかは、歴史をたどったら理由があったり、どうしようもなかったそのときの事情があったりするので、単純に整理できるものではないのだと思います。

他市での校区再編の委員会に参加したことがあるのですが、やはり地元住民の気持ちというものは、学校統廃合や校区再編を考える上で重要な要素でありました。

また、学校という場の存在意義ですが、子ども達の居場所であることは間違いないのですが地域にとってもどのような場所なのかも考えなければなりません。

子どもが増えてきた40年前であれば、教室が足りないけどプレハブではだめだ、運動場が狭くなるから新しい学校を作るという状況と、全く異質の苦労があります。

次回、西圏域や中圏域の話をしていくときに、今回の会議で不明だった点等を資料に加えていただければと思います。

安田委員におかれましては、一番意見を言いにくいトップバッターをお願いしましたが、今までの意見や話を聞いた上で、加えること等があればよろしくおねがいします。

《安田委員》

大丈夫です。

《坂本会長》

それでは、本日はお忙しい中、この審議会のために来ていただきました3人の校長先生にお礼を申し上げますとともに、東圏域独特の問題の難しさを実感した幸いです。

今回は地域を絞った議論をしましたが、事務局としては、次回、西圏域と中圏域を一括とする予定ですか。

《黒木理事》

そうです。

《坂本会長》

現状の計画では、次回は、西圏域と中圏域を地域の課題として議論するとのことですので、私たち委員もそのつもりでいたいと思います。

加えて、後半で委員からでました意見として、これからの議論の進め方について、事務局としての計画や考え方についてお示しいただき、それらを踏まえた上で進めていきたいと考えておりますので、ご準備方よろしくをお願いします。

《西堀委員》

1つだけ情報提供をしたいと思います。

私は、都市計画審議会にも参加させていただいておりまして、その審議会において都市計画マスタープランの改定をされると聞いております。

そうしたものを見ながら、議論を進めていければいいなと思います。

《清水委員》

他の市町村でも、同様の校区再編をしていったときに、町内会と校区の線引きが違っていて、とても大変だという声を地域の方から聞いたことがありますが、羽曳野市ではそのあたりはどうかのでしょうか。

《坂本会長》

今、清水委員からの質問は、私も他市で校区再編をするときに同様の経験がありました。今がおかしい場合もありますし、再編したらおかしい場合もあったりと開けたらいけないパ

ンドラの箱的な内容もあり得ますが、羽曳野市ではそのような課題を抱えているのかどうか。

《村田教育長》

羽曳野市には、調整区が3か所ありますので、行く学校によっては、校区と町内会が異なる可能性はあります。

例えば、高鷲8～10丁目は、地域的には高鷲南小学校区になりますが、歴史的に高鷲小学校にも行けることになりますので、同じ地域でも、高鷲南小学校に行く子と高鷲小学校に行く子がいます。

《坂本会長》

このことは、次回の西圏域、中圏域に関しての議論のときにまた情報提供をお願いします。

《清水委員》

なぜお聞きしたかという、小学校区という、町内会だけでなく色々な単位となることも多いと思いますのでお聞きしたいです。

《坂本会長》

本日の会議におきましても、たくさんの意見をお聞きし、現場の校長先生のお話を聞くこともできた有意義な会議であったかと思います。

それでは、マイクを事務局にお返ししたいと思います。

《司会》

坂本会長、議事進行ありがとうございました。

委員の皆様におかれましても様々のご意見ありがとうございました。

それでは、ここで事務連絡をいたします。

次回の第5回教育改革審議会は、8月9日（金）の15時からを予定しております。

また、第6回につきましては、今お手元にお配りしております用紙をお帰りの際にご提出いただきたいと存じます。

なお、予定がそろわない場合につきましては、運営上、会長の日程に合わせて進めていきたいと思っておりますので、どうかご了承ください。

それでは以上をもちまして、第4回羽曳野市教育改革審議会をお開きとさせていただきます。

皆様どうもありがとうございました。